

「わたしたちは、真理に逆らっては何をする力もなく、真理にしたがえば力がある。」

(コリント人への第二の手紙13章8節 口語訳)

## 高慢が招いた恐るべき代価

文豪としても名高い森林太郎(鷗外)は、陸軍軍医総監にまで上り詰めた、エリート中のエリートであった。5歳で「論語」を、8歳でオランダ語、10歳でドイツ語を学び、11歳で第一大学医学校(東大医学部予科)に入学、19歳という史上最年少で東大医学部を卒業し、陸軍軍医となった。2300ページの医学書をわずか10ヶ月で翻訳したことが評価され、ドイツ留学を果たし、当時、細菌学で世界の最先端の研究をしていたロベルト・コッホのもとで学ぶ。

当時、陸海軍で焦眉の急となっていたのが、脚気の対策であった。明治の日本では、年間3万人が脚気で命を落としていたからである。陸海軍でも、兵士の4割は脚気で苦しんでいた。今でこそ、ビタミンの欠乏が原因であるとわかっているが、当時ビタミンは未知の栄養素であった。末梢神経がおかされ、足がしびれ、むくみ、やがて痩せ衰えていき、死ぬことも珍しくない。当時は結核に次いで、第二の死因であり、人々から恐れられた。

陸軍軍医の森は、最先端の細菌学を学んで帰朝した誇りがあったためか、脚気の原因を細菌によるものと断定し、東大出身者が占める他の軍医たちもそれに賛同した。しかし、どのような細菌によるかは不明のままであった。

しかし、原因は細菌ではなく、栄養の偏りにあるのではないかと提唱する人物が現れた。海軍軍医の高木兼寛である。彼はイギリスの聖トーマス病院医学校で疫学を学び、実証的に原因の追求をしたのである。そして、留学したヨーロッパでは脚気が存在しないことから、日本の兵士の食事に問題がある、との仮説を立てた。当時、兵士の食事のほとんどは白米と少量のおかずのみであったからである。そして白米を麦飯に代える大規模な試験を実施した。驚くべきことに、脚気にかかった兵士は皆無であった。海軍はこのデータをもとに、陸軍に食事の改善を勧告するが、陸軍は森を中心に、頑ななまでに白米主義に固執し、海軍のデータがよかったのは偶然である、と言いはった。

森の名文と雄弁の攻撃を受け、高木は表舞台から姿を消す。

しかし、どちらが正しかったかは残酷なまでに明白であった(下表参照)。森は死ぬその日まで自分の間違いを認めなかった。その頑固さのゆえに、自身が健康管理の最高責任者を務めた台湾での被害も入れれば、数万人を死なせた責任があったことに、生涯向き合うことはなかったのである。高木の発見が後にビタミンの発見につながり、大きな恩恵をもたらしたと、何と対照的であろうか。

真理の前に、へりくだって自分の過ちを認めることは何と難しいことであろう。しかし、自分の考えとどれほど違っていたとしても、真理だとわかった時に、それを謙遜に受け入れる時の報いは何と大きいことだろう。

これは、聖書に対する私たちの態度にも言えることではないだろうか。



森鷗外(1862-1922)



高木兼寛(1849-1920)

	脚気による死者数	
	海軍(麦飯主体)	陸軍(白米主体)
日清戦争(明治 27)	0	3,944
日露戦争(明治 37)	3	27,468